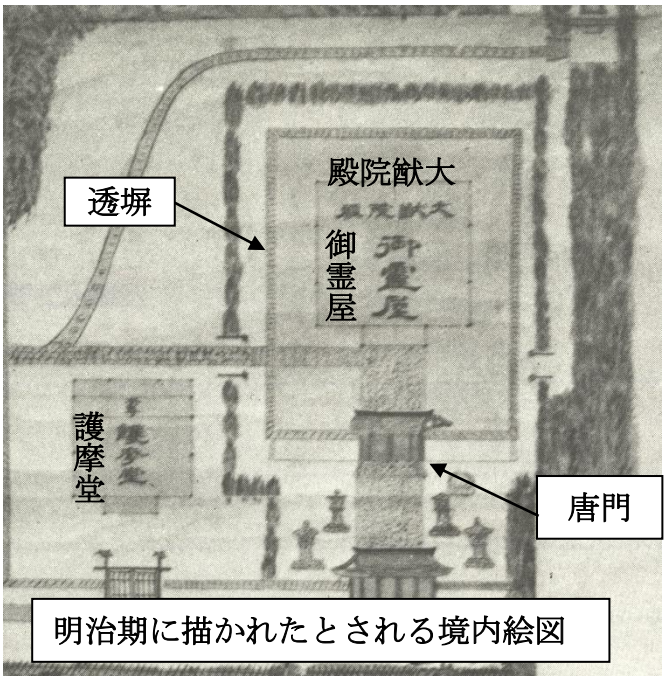
龍華院大猷院霊屋　再建 200 周年記念特別公開

令和 4 年 11 月 19 日
掛川市文化・スポーツ振興課

●静岡県指定有形文化財（建造物）　龍華院大猷院霊屋の概要

龍華院大猷院霊屋は、掛川城天守から北東 500m の小高い山の上に位置し、明暦 2 年（1656）に、掛川藩主北条氏重が三代将軍徳川家光の位牌を祀ることを幕府に願い、建てられました。文政元年（1818）三月に火災により春日厨子と位牌以外が焼失し、文政 5 年（1822）に掛川藩主太田資始により再建されました。

霊屋は、間口、奥行きともに約 5.5mの方形造で、濡縁には高欄を巡らせていました。漆塗・極彩色が施され、小規模ではありますが権現造の東照宮社殿を思わせるきらびやかな建造物であったことが感じられます。霊廟建築として優れたものとして、昭和 29 年 1 月に静岡県指定有形文化財（建造物）に指定されました。



出典（「静岡県指定有形文化財　龍華院大猷院霊屋修理工事報告書」）

往時には、さらに霊屋正面に唐門があり、他三面を透塀が囲んでいて、またご祈祷に使う護摩堂も建てられていたことが右上図の明治期に描かれたと考えられている境内絵図からわかっています。

●霊屋建立に渦巻く政治的事情

この霊屋創建の裏には、北条氏重と幕府の政治的事情があったとも言われています。当時、北条氏重には跡取りとなる息子がいませんでした。江戸時代では、跡取りがいないまま当主が亡くなると、絶家（家系が断絶すること）となってしまうため、氏重としては深刻な問題でした。霊屋が建てられた場所は、かつて徳川家康が掛川城を攻め落とすときに本陣を置いた場所であるとも言われ、徳川家ゆかりの場所に家光の霊屋を建立することで、氏重は、幕府や将軍家に良き配慮を得ようとしていたのではないでしょうか。

WEB アンケートへのご協力をお願いします

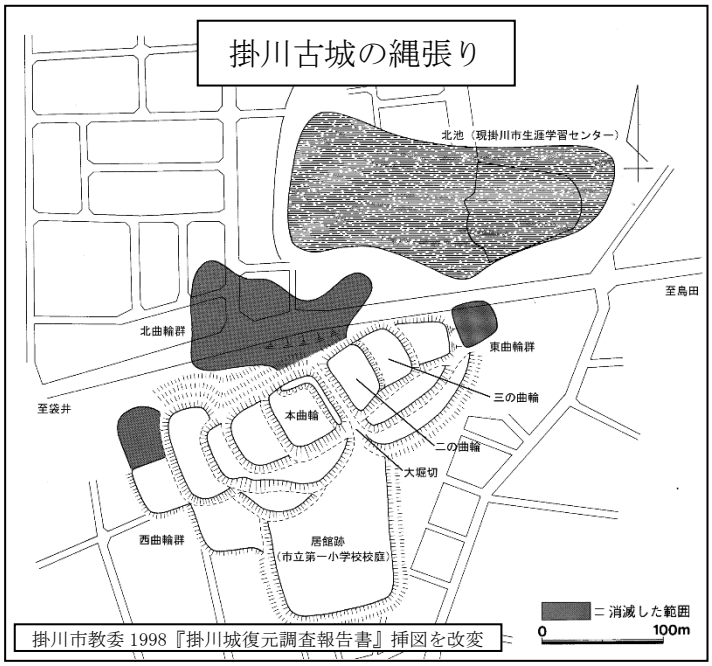
アンケート回答先

本日は龍華院大猷院霊屋の特別公開に
ご参加いただきありがとうございました。
右の QR コードからアンケートにご回答ください。
皆さんの感想、ご意見をお持ちしています。

掛川古城について

●掛川古城の概要

掛川「古城」は、掛川城の北東500mに位置する子角山（天王山）に築かれた山城です。駿河守護（静岡県中部）の今川氏が遠江（静岡県西部）支配の足掛かりとして、重臣の朝比奈泰熙に命じて築城したと云われています。築城時期は定かではありませんが、文明年間（1469-1487）、明応年間（1492-1501）等いくつかの説があります。16世紀前半に、息子の朝比奈泰能が今川氏の勢力拡大に伴って現在の掛川城の地に「新城」を築城し、城としての機能が移されました。



掛川市教委 1998『掛川城復元調査報告書』挿図を改変

永禄11（1568）年から翌12年にかけて、三河の徳川家康が掛川城の周囲に15ヶ所の砦を築き掛川城を包囲した際には、今川・朝比奈方である掛川城の北東を守る出城の1つとして、古城が用いられたと考えられています。半年にも及ぶ戦いの末に掛川城は開城し、既に駿河を失っていた今川氏真は相模の北条氏を頼り、落ち延びました。古城の廃城時期は明らかではありませんが、少なくとも江戸時代の初めには城郭としての機能を失ったと考えられます。

●掛川古城の縄張り

龍華院大猷院霊屋が建立された本曲輪を最高所とし、子角山を分断する大堀切を挟んで東側に二の曲輪、三の曲輪が配されます。本曲輪北側に位置する北曲輪群、三の曲輪東側に位置する東曲輪群等は後世の開発によって消滅しています。曲輪内部も江戸時代前半以降、様々な目的で大きく改変されているものの、土塁や大堀切などの遺構が良好な形で残されています。また、古城の南側に位置する掛川市立第一小学校付近には、古城に伴う居館があったと想定されています。

●掛川古城の見どころ

本曲輪と二の曲輪の間には、現況で幅約15m、深さ約7mの大堀切が残っており、見る者を圧倒する規模です。平成16（2004）年に実施された発掘調査の結果、現況よりもさらに3m程度深い箱堀であったことが明らかとなりました。近年では、朝比奈氏段階の堀切を徳川氏がより大規模なものへと改修したのではないかとする研究者もいます。